

6. スーパーボンドの臨床応用例

3. 接着スプリントの装着

スーパーボンドを応用した動揺歯固定には、前述のスーパーボンドのみによるレジン直接固定の他に、キャストメタル、メッシュ板などで補強する接着スプリント法があります。動揺の程度が高く、スーパーボンドのみの固定では強度が不足することが懸念される場合に用いられます。

臨床上のポイント

- ①印象採得時や装着時の歯牙移動を予防するため、印象前に唇側より暫間固定を行っておくとよい。
- ②金属色の遮蔽を期待する場合は、ポリマー粉末としてオパークピンク、オパークアイボリー、ラジオペークもしくは混和ラジオペークを使用する。
- ③レジンが硬化するまでフレームを動かさないように注意する。

臨床例3-1 鋳造板による接着スプリント



①重度の歯周疾患と歯牙崩壊のため全顎補綴を必要とした54歳の女性。321|123はキャストメタルによる膿漏固定を計画した。(初診1979年2月)



②あらかじめ唇側よりワイヤーで暫間固定を行い、印象時及び装着時における歯牙移動を予防する。



③術前のX線像。



④白金加金により作製したキャストメタルのリテーナー。当時の手法として金属内面処理は加熱処理を行ったが、現在ではV-ブライマーがあり、前処理が簡単となった。(装着1980年5月)



⑤14年3ヶ月経過時のX線像。支持骨のほとんどなかった前歯部も十分持ちこたえている。(1994年8月)



⑥15年5ヶ月経過時の舌面観。(1995年10月)



⑦装着後16年8ヶ月後の正面観。下顎前歯部の固定部は歯肉の退縮を認めるが、大きなトラブルもなく良好に経過している。(1997年1月)



⑧17年2ヶ月後に、3|の舌面板が剥離して来院。(1997年7月)



⑨レントゲン像で判るように、長期固定の効果で支持骨が安定し、6前歯の骨種も安定しているため、3|の部分の舌面板だけ切除することにした。



⑩削除後の3|の舌面観。17年間スーパーボンドで固定されていた面であるが、二次カリエスの発生は認められない。



⑪17年3ヶ月経過後の正面観。(1997年8月)

臨床例3-2 メッシュ板による接着スプリント



①鋳造板の代わりにメッシュ板を利用し、石膏模型上で圧接することにより簡便にスプリントの作製が可能である。



②スーパーボンドでメッシュ板を接着し、接着スプリントとした。メッシュ板は薄く、フレキシブルであるので、個々の歯の動揺による“ねじれ”に対し緩衝的役割を果たす。